

アドリブ・ナイト

2008(平成20)年1月28日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



特集

熱狂的ブームの去った今こそ真価を問う！

監督・脚本=イ・ユンギ／原作=^{ないらあすこ}平安寿子『アドリブ・ナイト』(文春文庫刊『素晴らしい一日』に所収)／出演=ハン・ヒョジュ／キム・ヨンミン／キム・ジュンギ／キ・ジュボン／チェ・イルファ／イ・ヒョンジョン／ヨ・ミング／クォン・ダヒョン／イ・ジャンウク／ユン・ヒソク (パンドラ配給／2006年韓国映画／99分)

……世の中には、瓜二つの少女がいるもの……？ そのため、『春のワルツ』で大ブレイクした美女ハン・ヒョジュが、けったいな(?)「アドリブ・ナイト」に巻き込まれることに。臨終の床にある父親を前に展開される、家族と隣人たちのドタバタ人間模様は面白いが、さて彼女がそこから学んだものは……？ あっと驚くヒロインの正体明かしを含めて、この映画はしっかりと人間性を見つめていくきっかけになるのでは……？

第2のキム・ギドク……？ イ・ユンギ監督に注目！

『アドリブ・ナイト』は、『チャーミング・ガール』(05年)、『ラブ・トーク』(05年)に続くイ・ユンギ監督の3作目だが、イ・ユンギ監督は第2のキム・ギドクと呼ばれているらしい。それは、彼の映画作家としての才能はもちろんだが、そのデビュー作がキム・ギドク監督と同じ製作会社であることや世界の映画祭を目標にしていることなどの共通点が多いためだが、低予算かつ短期間で撮影するのもキム・ギドク流……？

そう、『アドリブ・ナイト』は、HD(ハイディフィニッション：高精度映像)フィルムを使用してわずか10日間で撮影した映画で、監督は「普通の映画が“マラソン”だとすれば、この作品は“100m競争”だった」と言っているとのこと。大金をかけたハリウッドの超大作もいけど、たまにはこんな低予算で、一晩の出来事を切り取っただけの興味深い映画もいいのでは……？ そんな、第2のキム・ギドク、イ・ユンギ監督に注目！

これも、原作は日本の作家！

韓国では最近、唯川恵の『肩ごしの恋人』や貴志祐介の『黒い家』など日本の作家の原作が映画化されているのが目立っている。『アドリブ・ナイト』も、平安寿子の短編小説集『素晴らしい一日』に収録されている『アドリブ・ナイト』が原作。すなわち、プレスシートによるとイ・ユンギ監督が「映画になる可能性がいちばん高いと思ったのが、『アドリブ・ナイト』だった」わけだ。なぜそうなったのかというと、「韓国にはエンターテインメント小説の伝統がないので、書店に行くと日本小説を物色する習慣があった」ため……？ もっとも、「ただ短編なので、100分の映画を作るのは難しい。そこで、私が色々なエピソードを追加したり、原作とは内容的に順序を変えたりして、創り上げた」とのこと。そして「しかし、根本にある人間関係の描写は変わっていない」とのこと。さらに「私達は、日本と韓国では文化も風土も違い、それゆえ人々の気持ちにも違いがあると思いがちだ。しかし、原作をそのまま映画化して韓国でも違和感なく受け入れられた本作から、家族や他人との人間関係のあり方や“人の情”といったものは、国境を超えて普遍的であるということに気づかされる」とのことだ。イ・ユンギ監督は本作の映画化にあたってこの平安寿子とも意気投合し、短編集の表題作となっている『素晴らしい一日』がイ・ユンギ監督の4作目としてまもなく撮影が開始されるらしい。それだけ日本には映画のネタとなる優秀な原作が多いということなら、私はうれしいのだが……。

あの美女に惹かれて……

私は韓国の人気ドラマ『春のワルツ』をテレビで1度だけ観たことがある。ユン・ジェハ役のソ・ドヨン君もイケメンだが、そのヒロインを演ずるハン・ヒョジュの顔は一目で覚えてしまった。したがって、何を隠そう私が『アドリブ・ナイト』を観ようと思った動機は、何よりもこのハン・ヒョジュを観たいため……。

プレスシートによると、彼女は1987年生まれの若手。だから、演技経験は少ないはず。そのうえ私が思うに『アドリブ・ナイト』でハン・ヒョジュが演ずるのはかなりの難役。だって彼女はA子というれっきとした本名を持っているのに、じっとA子の姿を見ていた2人連れの若者キヨン（キム・ヨンミン）とヨンス（イ・ジャンウク）から「キミ、ミョンウンだろ」と言われ、いくら「人違いです」と言っても信じ

てもらえず、挙げ句の果てに、人助けのためにミョンウンになりすます役を仰せつかることになるのだから……。さらに映画の冒頭、土曜日の繁華街の雑踏でケータイを手に人待ち顔でたたずんでいた彼女は、いかにも清純で楚楚とした感じだが、実はあっと驚くウラの顔を持っていることがラストに明らかになるのだから……。

さて、そんな難役に『春のワルツ』の美女ハン・ヒョジュがいかに挑戦……。それがこの映画の見どころだが、彼女の演技がハン・ヒョジュ目当てに観に行った人を決して失望させるようなレベルでないことだけは、私が保証しておこう。

A子の役割は……？

A子がキョンから聞いたのは次の2つ。すなわち、①ミョンウンは10年前に家出したまま音信不通であること。②今ミョンウンの父親キョングク（キ・ジュボン）は末期ガンで昏睡状態にあるため、死ぬ前に一目だけでもミョンウンに会わせてやりたいこと。それなら、A子がミョンウンでないとわかれば連れていっても仕方ないのだが、キョンにしてみれば、誰がどう見てもA子はミョンウンそっくり。したがって、彼女がミョンウンだと名乗ったら誰もニセモノとは気付かないから、身代わりでもオーケーと腹をくくったわけだ。ヨンスは「そんな無茶な……」と心配したが、キョンの話にウソはないと判断したA子は、キョンらに同情し、これを承諾。そこでA子が父親の前に座った時に果たすべき役割は「お父さん、ごめんなさい」と言うことだが、それくらいならA子にもできそう……？

キョングクの家族や隣人たちは……？

以上の導入部が終わると、いよいよキョングクの家が集まったミョンウンの家族と隣人家族たちの面白い「アドリブ・ナイト」が始まる。臨終の床にあるキョングクをめぐる展開される面白い人間模様の中心になるのは、隣人から兄の財産を狙っていると疑われているキョングクの弟夫婦と、キョングクから大金を借りたまらしい隣人夫婦。さらに、弟夫婦の仲を割くかのように、かつて弟の恋人だった(?)という女性が登場したり、ミョンウンの昔のボーイフレンドのジホ（ヨ・ミング）や、ミョンウンのように自由に都会に出たいと思っている隣人夫婦の娘ジニョン（クォン・ダヒョン）も登場するから、話はややこしい。一般的に韓国人は日本人よりも感情表現が豊か(?)だから、キョングクの前でもみんな大声で泣いたりわめいたり、

そして喧嘩したり……？ そのうえ彼ら、彼女らの演技はすべてアドリブで進んでいくらしい(?)から、さて何が飛び出してくるのやら……？

ソックスを履くシーンに注目！

キヨンらが連れてきたA子を見たたんにつっかりミョンウンだと信じてしまったのは隣人の妻だが、その他臨終の席に集まっている人たちは一様にA子のことをミョンウンと信じることに。しかし、そんなA子をミョンウンの身代わりとして、父親のキョングクに「お父さん！」と話しかけさせることについては、当然賛否両論が……。さらに、キョングクがすんなり息を引き取ればそれでおしまいだ、その様子を見てみると、どうも今日は徹夜になりそう……。そんな中、手もちぶさたのA子が、出て行った時の状態のままにしてあるミョンウンの部屋の中で見せるある1つの行動が面白い。それは、A子がミョンウンのタンスの引き出しからソックスをひき出し、それを履くシーン。原作にもわずか2行だけそんなシーンがあるとのことだが、監督はこのシーンにかなり力を入れている。もちろん、セリフもなく淡々と演じているだけだが、A子のミョンウンに対するさまざまな思いが象徴されていて興味深い。原作者が仕掛けた、「2人の女をつなぐ一足のソックス」という感覚がスクリーン上に映像として示されるわけだが、さてこのシーンに対するあなたの受け止め方は……？

A子は何を学んだの……？

この映画はそのタイトルどおり、死の床にあるキョングクの家が集まった人たちの涙と笑いの「アドリブ・ナイト」を描いたもの。その物語のポイントは、そんな「アドリブ・ナイト」にA子がミョンウンとして参加していく中、ミョンウンの昔の恋人ジホとの会話も含めて、人間の温かさ、優しさ、人情を感じとり、そこから何かを学んでいくこと。一夜明けて、今A子はキヨンの車で町まで送ってもらったが、なぜかA子はキヨンが差し出す謝礼を受け取らず、キョングクへのお供えにしてもらうことに。さらにここでA子はキヨンに対して、なぜあの時、あの場所でケータイを持って立っていたのかについて、驚くべき告白を……。

さて彼女はこの一連の出来事によって、何を学ぶことができたのだろうか……。それをじっくりと考えていけば、人間性についていろいろ学ぶことがあるうえ、この映画の面白さが十分わかるはず……。 2008(平成20)年2月13日記